シュクシーンの短編小説『試験』の教材としての教育的価値

阿出川　修嘉・秋山　真一

Аннотация

Данная работа посвящается оценке педагогической значимости рассказа В. М. Шукшина «Экзамен» как материала для чтения на занятиях РКИ (русского языка как иностранного). В известном учебнике русского языка «Дорога в Россию» (Антонова и др. 2011) включён текст рассказа «Экзамен», однако текст переписан, чтобы учащиеся могли легче понять содержание. Сопоставляя оригинальный текст с адаптированным текстом в учебнике, можно выяснить важные пункты, которые авторы учебника хотели показать преподавателям. Для этой цели мы выстроили оригинальный и адаптированный тексты параллельно.

Данная работа состоит из введения, четырех глав, заключения и списка литературы.

Во введении (в первой главе) ставится исследовательская цель данной работы. Во второй главе даны краткие описания истории жизни В. М. Шукшина и его рассказа «Экзамен». Также объясняется то, на каких занятиях используют текст «Экзамен» как материал для чтения. В третьей и четвертой главах речь идёт о морфологических и синтаксических особенностях текста Шукшина и адаптированного текста. В третьей главе особое внимание уделяется употреблению глагольных форм в оригинальном и адаптированном текстах. Пятая глава посвящена оценке педагогической ценности рассказа с точки зрения Реалии. Форма устного экзамена в университетах России отличается от экзаменов в Японии и мало знакома японским читателям, поэтому такая реалия очень важна для хорошего понимания текста «Экзамен». В заключении подведены итоги работы и сделаны выводы обобщающего характера.

Третью главу (морфологическую часть) и заключительную часть написал

автор Н. Адэгава, а первую, вторую, четвертую и пятую главы (введение, синтаксическую часть и часть о реалии) — автор С. Акияма.

1. はじめに

本稿の目的はソ連時代の作家ワシーリイ・マカーロヴィチ・シュクシーン（Василий Макарович Шукшин）の短編小説『試験』«Экзамен» およびそれをもとに再編した教材を比較し、オリジナル作品と教科書版を使用してロシア語教育を行う際の教育的な価値について論じることである。
本稿では第 2 章でシュクシーン自身やシュクシーンの作品『試験』、およびそれを扱うロシアで出版されている教科書『ロシアへの道』« Дорога в Россию » に関して概略を述べた後、第 3 章で統語論的な観点、第 4 章でレアリアを中心とした観点、第 5 章で動詞を中心とした観点で教材の教育的価値を論ずる。

執筆は第 1 章（はじめに）および第 2・4・5 章を秋山が、第 3 章および第 6 章（結論）を阿出川が担当した。

2. シュクシーンと短編小説 Экзамен『試験』について

2.1. シュクシーンについて

ワシーリイ・マカーロヴィチ・シュクシーンは 1929 年、西シベリアのアルタイ地方のスローストキ村に生まれたソ連時代の作家である。日本での知名度はそれほど高いとは言えないが、ロシアでは非常に有名な作家で、1950 年代の末から短編を中心に文学作品を発表する一方、俳優、脚本家、映画監督としても活躍した。代表作には自分自身が監督を務め、俳優として主役も演じた『あかいカリーナ』がある。1974 年に心臓発作で急死した。

2.2. 短編小説『試験』

本稿で扱う短編小説『試験』（原題 «Экзамен»）は 1960 年に書かれた作品で、最初に掲載されたのは作家同盟の機関紙『十月』（原題 «Октябрь»）の 1962 年第 1 号である。また当該作品は著者自身によって『農村生活

者』（原題 «Сельские жители»）および『作品選集』（原題 «Избранные произведения»）の中に収められている。

『試験』は 6 巻本の全集の中でもわずか 7 ページに収まる短編である。タイトルを含め、総語数は 1,762 語で構成されている。大学の通信教育を受けている学生のニコライ Николай がグリゴーリエフ教授（Профессор Григориев）のもとを訪れ、口述試験を受け終わるまでのシーンを描いている。

『試験』の本文に関し、モスクワで 1992 年に出版された 6 巻本のシュクシーン全集、エカテリンブルクで 1993 年に出版された 5 巻本のシュクシーン全集、廉価版としてペーパーバックで 2017 年にサンクト・ペテルブルクで出版された短編集の 3 つを比較した。それぞれにおいて句読点の有無や引用符の種類の相違、疑問符 (?) と感嘆符 (!) との相違、『イーゴリ遠征物語』の引用部分をロシア革命前の旧正書法で表すか、革命後の新正書法で表すか、などの差異があるが、他の 2 つのテキストともっとも大きな差異を示したのはエカテリンブルクで出版された 5 巻本であった。そこでは他の 2 つのテキストにみられない文が挿入されていたり、ある文が削除されていたりしていた。本稿ではモスクワで出版された 6 巻本に掲載されたテキストを底本として引用することにする。

2.3. 教材としての『試験』

一方、教材としての『試験』はロシアで出版されているロシア語教科書『ロシアへの道』（Антонова и др. 2011 «Дорога в Россию»）の第 3 巻第 1 分冊の第 3 課、89-91 ページに収められている。タイトルを含め、総語数は 1,006 語であるから、オリジナル版テキストとの比率で 57% の語数をカバーしていることになる。

教科書『ロシアへの道』はロシア語学習未経験者（CEFR でいう A0 レベル）から対応しているシリーズものの教科書だが、第 3 巻第 1 分冊は外国語としてのロシア語試験（Тесты русского языка как иностранного、略称 ТРКИ）の第 1 レベル（CEFR でいう B1 レベル）を対象としている。

上記レベルのロシア語学習者にとって難解であり、かつ、まだ習得するレベルにないと思われるようなオリジナル版テキストの箇所は大胆に

削除されている[1]が、教科書版テキストはオリジナルから難解な部分を削除されただけのものとはなっていない。場合によってはオリジナルにない表現を補ったり、話の内容を前後させたりする編集も行われている。また、当該教科書の第3課では文法項目として形動詞を扱っているため、オリジナルでは人称文になっている箇所が形動詞を用いた構文で置換されたりするなど、学習目的に沿った改編が行われている箇所も多々ある。

本学外国語学部ロシア語学科では、学科に所属する学生の必修授業として2年次に行う週6コマの基礎ロシア語Ⅱの授業のうち2コマを「講読」として区別しているが、その「講読」の授業において2名いる教員のいずれかがこの教材を扱って講読のテキストとしている。（教員および年度によって扱わないこともある。）

3. 動詞の観点から見た価値

3.1. 本章の概要

本章では、Антонова и др.（2011）において導入されている、『試験』のオリジナル版テキスト及び教科書版テキストの双方で用いられている動詞を中心に考察を加え、教科書版テキストの価値・有用性について検討を試みる。

外国語としてロシア語を学ぶ場合、学習者にとって少なからぬ負担となるのは、動詞の意味・用法の理解と習得であろう。ロシア語動詞を習得する際に困難を覚えるのは、法、時制、人称といった種々の文法的カテゴリーに応じた語形の豊富さという形態論的な問題に加えて、主にアスペクトの意味の表現を担う「体（たい）」のカテゴリーに代表される、それぞれの文法的カテゴリーの意味・用法の習得の問題が挙げられるだろう。

そのような外国語学習の過程において、教科書を始めとする学習教材に求められる重要な役割のうちの1つに、テキストの読解に取り組むことを通じて、具体的な動詞の使用例に触れさせ、その意味・用法の理解を促すことが挙げられる。その際、どのようなジャンルのテキストを使

1　主として『イーゴリ遠征物語』の内容に触れた箇所や物語の引用部分は削除されている。

用するかが問題になるが、しばしば文学作品が取り上げられることがある。文学作品のテキストに触れるということは、第5章でも触れるように、レアリアなどの言語文化的な特徴を学習者に紹介するという意味合いもあり、外国語学習において有益な効果をもたらすことは疑いがない。

しかしながらその一方で、文学作品のテキストは、オリジナルの文章のままでは、学習年数の少ない学習者にとってなじみの薄い語や表現などが含まれることが通常であり、文の意味、ひいてはテキスト全体の意味を理解する上でそれらが妨げになってしまうという懸念がある。そのため、教科書に採用するためには、オリジナルのテキストに一定の基準で改変を加える必要が生じてくる。

本章では、『試験』のオリジナルのテキスト及び教科書版のテキストのそれぞれの本文で用いられている動詞について、どのように取捨選択されており、またその変更がどの程度適切なものと判断できるかを、以下の点に注目しながら検証する。

第一に、両テキスト内で用いられている動詞の総数について、どのような増減が見られるのか、またそれぞれのテキストで用いられている文法形態がどう増減しているかを計量的データとともに確認する。

次に、本文で用いられている動詞の、外国人にとっての難易度という観点から、オリジナルと教科書版とでどのような変更が見られるかについて、『現代ロシア語語彙体系（Система лексических минимумов современного русского языка. 10 лексических списков. От 500 до 5000 самых важных русских слов）』（В.В. Морковкин 監修、2003；以下 «Система»）の語彙リストを援用して考察する。

第三に、動詞の語法について、オリジナル版テキストと教科書版テキストの間で見られる相違について指摘し、そこでの修正が行われた要因について考える。

3.2.　テキスト内の動詞の使用実態に関する計量的データ

3.2.1　動詞の使用例総数

まず、それぞれのテキストで用いられている動詞の総数（延べ語数）について確認する。

オリジナルでは、396の使用例であるのに対して、教科書版では、227

例である。それぞれのテキストの総語数と、テキスト全体に対して動詞の使用例の占める割合をまとめると、下表のようになる。

表 1：動詞の使用例総数とテキスト全体に占める割合の比較

	動詞の使用例総数	テキストの総語数	動詞の占める割合（%）
オリジナル	396	1,762	22.47
教科書版	227	1,006	22.56

テキスト全体の語数に対する動詞の占める割合は、オリジナルと教科書版のどちらもおよそ 23% となっており、ほとんど変化が見られないことがわかる。

3.2.2. 動詞の文法形態に関する使用例総数

双方のテキストで現れた動詞の文法形態は、過去形（прочитал[2], читал, был）、現在形（читаю, есть）、現在・未来形（прочитаю）、合成未来形（будет читать）、未来形（будет）、命令形（прочитай, читай, будь）、不定形（прочитать, читать, быть）、仮定法（прочитал бы, читал бы, был бы）、副動詞形、形動詞形（受動形動詞過去、能動形動詞過去）となる。それぞれに分類して示すと下表のようになる。

なお、丸括弧内は総数に対する百分率を示している（いずれの項目も割合が 100 パーセントとなるものは百分率を示していない）。

2　以下この箇所で、丸括弧内にそれぞれの文法形態を、完了体動詞 прочитать、不完了体動詞 читать、また動詞 быть を例として用いて語形を示す。副動詞、形動詞のそれぞれの形態については、3.4.1. を参照。

表 2：当該テキスト内の動詞の文法形態ごとの使用頻度

	オリジナル				教科書版			
	完	不完	быть	総数	完	不完	быть	総数
過去	137 (55.24%)	92 (37.09%)	19 (7.66%)	248	76 (52.77%)	49 (34.02%)	19 (13.19%)	144
現在 [3]	–	59 (98.33%)	1 (1.66%)	60	–	28 (96.55%)	1 (3.45%)	29
現在・未来 [4]	5	–	–	5	4	–	–	4
合成未来 [5]	–	3	–	3	–	0	–	0
未来 [6]	–	–	1	1	–	–	1	1
命令	8 (34.78%)	15 (65.22%)	0	23	8 (42.11%)	11 (57.89%)	0	19
不定	19 (48.71%)	19 (48.71%)	1 (2.56%)	39	9 (36%)	16 (64%)	0	25
仮定法 [7]	2	0	0	2	0	0	0	0
副動詞	1 (14.28%)	6 (85.71%)	0	7	0	0	0	0
受動形動詞過去	6	0	0	6	5	0	0	5
能動形動詞過去	2	0	0	2	0	0	0	0
総数	180 (45.45%)	194 (48.98%)	22 (5.55%)	396	102 (44.93%)	104 (45.81%)	21 (9.25%)	227

3.3. 動詞の難易度レベルの観点から

テキストで用いられている動詞の難易度レベルの観点から見ると、教科書版にはどのような調整が施されているだろうか。

本稿では、この点について考えるための試みとして、動詞の難易度を測る指標として «Система»（2003）の語彙リストを援用した。

これは、ロシア語の教科書、学習用辞書などの執筆者や、外国人に対してロシア語を教授する教員などのために編纂された辞書である（«Система» 2003:[3]）。この辞書では、21 世紀初頭のロシア語の「核となる語彙」をフォローする語彙リストとして、頻度数及び意味の上で

3　これは不完了体動詞と быть（現在形は есть となる）のみが対象となる。
4　この形態は完了体のみとなる。完了体が人称変化すると、意味としては未来時制を表す。
5　この形態は быть の人称変化形と不完了体動詞の不定形との結合によって実現する。
6　これは быть の人称変化形を指す。
7　仮定法は、動詞の過去形と助詞быの結合によって表され、ここではそれを対象としている。

表 3：『試験』テキスト内の動詞レベル別分布

リスト	テキスト内の動詞の頻度数	
	オリジナル版	教科書版
I	217 (54.80%)	172 (75.77%)
II	25 (6.31%)	20 (8.81%)
III	30 (7.58%)	14 (6.17%)
IV	25 (6.31%)	9 (3.96%)
V	12 (3.03%)	7 (3.08%)
VI	12 (3.03%)	3 (1.32%)
VII	15 (3.79%)	2 (0.88%)
VIII	0	0
IX	4 (1.01%)	0
X	1 (0.25%)	0
リスト選外	55 (13.89%)	0
合計	396	227

の重要性などの要素に応じて選別された（cf. «Система» 2003: 6）語がリストの形で提示されている。

リストは、数字 0 が付されているもの（「ロシア語の構造上の基本語彙（основные структурные лексические единицы русского языка）」）と、ローマ数字の I ～ X までが付された 10 のリスト（「現代ロシア語の段階別必須語彙リスト（система градуальных лексических минимумов современного русского языка）」）の、合計 11 のリストから成っている。リスト I は 500 語から成り、それ以降はリストに 500 語ずつ追加されていき、リスト X は合計で 5,000 語となる。[8]

それぞれのテキストで用いられている動詞を、この語彙レベルリストごとに分類すると、表 3 のようになる。丸括弧内の百分率は、それぞれのテキストで用いられている動詞の総数に占める割合を示している。

上表を見ると、オリジナルのテキストにおいても、リスト I の動詞が動詞全体の使用総数の半数を超えていることから、比較的基本的なレベルの動詞によってテキストが構成されていることがわかる。

さらに教科書版テキストになると、リスト VIII 以降の動詞は用いられておらず、リスト I に属する動詞の割合が増え、動詞総数の 7 割を超えている。また、リスト選外の動詞が 0 になっていることからも、学習者にとってなじみの薄い、未習の動詞が用いられるという事態は避けられるよう

8　なお、リスト 0 は、含まれている語が基本的な数詞、所有代名詞、挿入語、間投詞などが主なものとなっており動詞は含まれておらず、今回の用途には適さないため考慮に入れていない。

に、適切に動詞の難易度が調節されていると考えてよいだろう。

3.4. 動詞の意味・用法における特徴的な改変

ここまでは、動詞の使用について計量的データを見てきた。本節では、具体的な動詞の使用例における改変について、特徴的なものを中心に見てみよう。

3.4.1. 副動詞、形動詞の扱い

ロシア語の動詞の諸形態のうちに、いわゆる分詞として機能する形態である、副動詞（副分詞）及び形動詞（形容分詞）という形態がある。副動詞は、副詞的に機能する動詞の形態で、語形変化はせず、主文の動作（状況）と同時並行で進行する動作もしくは先行する動作などを示す。それに対して形動詞は、形容詞と同様に性・数・格などに応じて語形変化し、修飾する語に付随する動作を示す。能動形動詞と受動形動詞があり、それぞれ現在と過去の時制形態を持つ。

表 4：動詞の副動詞・形動詞の形態

副動詞／形動詞		時制	不完了体	完了体
副動詞		–	читая	прочитав
形動詞	受動（被動）	現在	читаемый	-
		過去	(читанный)	прочитанный
	能動	現在	читающий	-
		過去	читавший	прочитавший

表 4 で、不完了体動詞 читать、完了体動詞 прочитать を例にとり、副動詞及び形動詞の形態を示す。

副動詞に関しては、オリジナルでは完了体副動詞が 1 例、不完了体副動詞が 6 例見られるが、教科書ではこのテキストが導入される時点ではまだ学習項目として紹介されていないため、それに伴って教科書版のテキストでは、オリジナルで用いられている例が変更されるか、該当部分が削除されている。

(1) Студент — рослый парняга с простым хорошим лицом — стоял в дверях аудитории, не решаясь пройти дальше.（Шукшин 1992: 31）学生は、素朴で良い顔立ちをした背の高い若者であったが、先に進もうかどうしようか決心がつかないまま、教室の扉のところに立っていた。
(2) Он стоял в дверях аудитории и не решался войти.（Антонова и др. 2011: 89）彼は教室の扉のところに立ったまま、入ろうかどうしようか決心がつかなかった。

上例 (1) で見られるオリジナルの表現（下線部решаясь）が、例 (2) の教科書版では решался と動詞の過去形へと変更され、文自体が複文構造となっている。

下例の (3)、(4) は、教科書版では削除されている副動詞、形動詞の例である。

(3) Профессор поднял кверху палец, как бы вслушиваясь в последний растаявший звук чудной песни.（Шукшин 1992: 37）
教授は、奇妙な歌の最後の融けていくような音に耳を澄ますかのようにして指を上にあげた。
(4) Вытер вспотевший лоб.（Шукшин 1992: 37）
汗の噴き出した額を拭った。

形動詞に関しては、オリジナルでは、能動形動詞過去が 2 例（双方完了体動詞）、受動形動詞過去が 6 例（全て完了体動詞）用いられているのに対して、教科書版では、能動形動詞の例はなくなっているものの、受動形動詞過去については 5 例（全て完了体動詞）とほぼ同数用いられている。形動詞形は、教科書内でこのテキストに触れる時点で導入済みであるため（第 2 ～ 3 課で既に学習する）、教科書版でも削除されることがないだけではなく、逆に、受動（被動）形動詞過去の形態へとわざわざ変更されているケースもある（下例 6 の下線部）。

(5) На улице он вспомнил про книгу. Раскрыл, прочитал: …（Шукшин 1992: 37）表で彼は本のことを思い出した。開いて、（書かれているこ

とを）読んだ。

(6) На улице он вспомнил про книгу. Открыл её и прочитал слова, написанные профессором: …（Антонова и др.: 91）

表で彼は本のことを思い出した。それを開いて、教授の書いてくれた［教授によって書かれた］言葉を読んだ。

3.4.2. 体の交替

次に、動詞の体のカテゴリーの用法について注目してみよう。体のカテゴリーの使用頻度数は、オリジナルと教科書版とでほとんど変化がないが（3.2.2. を参照）、顕著な例としては、以下の例が指摘できる。

(7) Ставьте мне двойку.（Шукшин 1992: 33）

(8) Поставьте мне двойку.（Антонова и др.: 90）

いずれも動詞の命令形だが、オリジナルの (7) では不完了体（ставить）が用いられているのに対して、教科書版 (8) では完了体（поставить）が用いられている。ここで動詞の体が入れ替えられた背景にどのような意図があると考えられるだろうか。

オリジナルに見られるこの不完了体の命令法は、いわゆる「促し」などを表す不完了体の用法であると考えられる。通常、一回の具体的・特定的な動作を示す場合には、（主に完了相を表す）完了体が用いられるが、この「促し」の用法は、ある動作への着手（побуждение к действию）を促すという機能を持ち、命令法などでしばしば用いられる（cf. Рассудова 1968: 103）。

単一動作を表すためには完了体動詞を、反復動作を表すためには不完了体動詞を用いるというような、体のカテゴリーの基本的な用法しか把握していない段階の学習者にとっては、この「促し」の意味・機能を持つ不完了体動詞の使用は、文の意味の理解の妨げにもなりかねず、そのため教科書版ではこの用法を回避したのだろうと思われる。

4. 統語論的観点から見た価値

『試験』のオリジナルと教科書版とを比較して、統語論的にも興味深い点はいくつかあるが、顕著であるのは連辞 быть の文末への移動を教科書版では徹底的に排除している点である。ロシア語の連辞 быть は「～である」という意味の他に、名詞や形容詞の変化形 словоформа と共に合成名辞述語 составное именное сказуемое を形成する用法がある。

(9)

– Так. Что понимаете?

– Я сам <u>в плену был</u>.

– Так… То есть как <u>в плену были</u>? Где?

– У немцев.　(Шукшин1992:33-34、下線は秋山)

「ほう。何を理解しているというのかね？」

「私自身が捕虜だったことがあるのです。」

「そうなのか…　つまり、どのように捕虜になったのかね？どこで？」

「ドイツ軍にです。」

(10)

– Что вы понимаете?

– Я всё понимаю, профессор, я сам <u>был в плену</u>.

– То есть как <u>были в плену</u>? Где?

– У немцев.　(Антонова и др. 2011: 89、下線は秋山)

「何を理解しているというのかね？」

「私はすべてを理解していますよ、教授。自分は捕虜だったことがあるのです。」

「つまり、どのように捕虜になったのかね？どこで？」

「ドイツ軍にです。」

(9) の 2 行目にある в плену という語形態は男性名詞 плен「捕虜」の в + 前置格形である [9]。その名詞の変化形と連辞 быть の単数男性過去形であ

9　本来子音で終わる男性名詞の前置格形は - eという語尾になるのだが、плен という名詞が前置詞 в と結合する場合には特別に -у 語尾をとり、かつアクセントも語幹から -у の語尾に移動する。この形態を第 2 前置格とも呼ぶ。

る был が結合して合成名辞述語を形成している。быть の過去形には「～へ行ったことがある」という経験の意味を表しうるため、ここでは「捕虜であったことがある」という和訳になる。ところが в плену был という語順は был が文末に倒置され、強調された語順である。理由は当該箇所以前で плен「捕虜」は既に話題に上った既知情報であり、時制を表す был の方が情報構造的に重要であるためである。本来ならば был в плену のように был が в плену よりも前に置かれる語順の方が標準的であり、教科書版の (10) では 2 行目でやはり был в плену という語順に改められている。

同じことが (9) の 3 行目 в плену были? という語順と (10) の 3 行目 были в плену? にも言える。ここでは省略されているが主語はвы「あなた」に置き換わっているため連辞 быть は複数過去形のбылиとなっているが、オリジナルではбылиが倒置されている一方で、教科書版では были в плену という標準的な語順のままとなっている。

この理由は教科書版の編集者が в плену был(и) のような倒置語順を学習者レベル（ТРКИ 第 1 レベル）ではまだ習得する必要のない項目であると考えているためであると推測される。

5. レアリアの観点から見た価値

レアリアという観点からすると、オリジナルと教科書版との比較で差異が見られる箇所よりも、むしろ教科書版でも削除されずに残った箇所の方が教科書編集者の意図が反映されていると言える。本稿ではロシアにおける口述試験の実施方法と成績評価という 2 点に注目する。

5.1. 口述試験の実施方法

シュクシーンの『試験』で描写される場面は大学の一教室で実施される口述試験である。ロシアの大学では今なお口述による教員と学生の 1 対 1 形式の試験が多く実施されており、試験の実施方法に関するレアリアを知らないと理解できない表現が、作品中に登場する。

(11)

– Берите билет. Номер?

– Семнадцать.
– Что там?
– «Слово о полку Игореве» – первый вопрос. Второй…
– Хороший билет, – …　　(Шукшин1992: 31)
「問題カードを取りなさい。番号は？」
「17 番です。」
「そこには何と（書いてある）？」
「『イーゴリ遠征物語』[10] が第 1 問です。第 2 問は…」
「いいカードだ。」（以下略）

この部分は教科書のテキストにおいても大きな差はない。
(12)
– Берите билет, — сказал профессор. — Назовите номер билета.
– Семнадцать.
– Что там? Какой там вопрос?
– Первый вопрос – «Слово о полку Игореве».
– Хороший билет. Вам повезло. –...　　(Антонова и др. 2011: 89)
「問題カードを取りなさい。」教授は言った。「カードの番号を教えて。」
「17 番です。」
「そこには何と？どんな問題ですか？」
「第 1 問は『イーゴリ遠征物語』です。」
「いいカードだ。君はラッキーだね。」（以下略）

冒頭に出てくる билет とは本来切符、チケットを意味する名詞である。つまり (11) および (12) の第 1 文を直訳すれば「チケットを取りなさい。」となる。しかし口述試験の場でチケットと言われても読者には理解されない。口述試験の場で билет といえば、それは裏向きに伏せてある試験問題のテーマが書かれたカードであることは明白であり、受験学生は会

10『試験』の中の重要な題材となるこの文学作品タイトルの邦訳は『イーゴリ軍記』とされることも多い。作者は不明とされる。本稿では木村彰一訳『イーゴリ遠征物語』（岩波書店、1983 年）に倣い、この邦訳を採用する。なお、ロシア語 «Слово о полку Игореве» から『イーゴリ遠征物語』という和訳にたどり着くには古代ロシア語・古代教会スラヴ語の知識が必要とされるため、授業時は作品の固有名詞として詳しく解説する必要がないと思われる。

場に入ると最初に裏向きの試験カードをくじ引きして試験課題を与えられるのである。

教科書で学ぶ学生にとって билет は 1 年生で学ぶ基礎語彙であるため、辞書を引かずに「チケット」と訳すことがあるが、『研究社露和辞典』で当該の見出し語を調べれば、全 6 つの語義の 5 番目として「(口答試験の)試験問題紙［問題カード］」という語義が与えられている[11]。当該箇所を予習してきている学生が「問題カード」という語義に触れていようと触れていまいと、教員がロシアの口述試験の実施方法というレアリアについて解説することが想定された良い教材であると言える。

なお、オリジナルと教科書版のテキストを比較すると、原作第 1 文でただ Номер?「番号は？」とされる部分は教科書版で Назовите номер билета.「カードの番号を教えてください。」のように変更され、何の番号を教授が求めているのかをよく理解できるように工夫されている。また、オリジナル第 3 文でЧто там？「そこには何と？」というやりとりも教科書版では Что там? Какой там вопрос?「そこには何と？どんな問題ですか？」と、ここでも質問の意図がわかりやすくなるように工夫がなされている。ただ、オリジナル第 5 文の Хороший билет,「いいカードだ。」という箇所を教科書版で Хороший билет. Вам повезло.「いいカードだ。君はラッキーだね。」とまで書き換えたのはやや細工を施しすぎという感もある。「いいカード」とは何が「いい」のか、が問題となる。教授にとってのいいカードとも学生にとってのいいカードとも解釈できるし、2 人の利害関係を超越していいカードであるとも解釈可能である。この教科書版の表現ではあくまでも学生、つまり受験者にとっての「いいカード」であると解釈を狭めてしまっている可能性もあるからである。

5.2. ロシアの成績評価

ロシアの大学における成績評価は、良い方から順に「5」から「2」までの 4 段階であることが普通である。「5」пятёрка は「優」отлично に該当し、「4」четвёрка は「良」хорошо、「3」тройка は「可」удовлетворительно、「2」двойка は「不可」плохо または неудовлетворительно にそれぞれ該当する。

11　東郷正延、他編『研究社露和辞典』97 ページ。

研究社露和辞典によると、日本の小・中・高等学校にあたる школа（学校）では「1」единица を「非常に悪い」очень плохо という評価として用いることもある[12] とのことだが、いずれにせよ大学の評価では普通「1」は用いられない。

こうした言語外現実であるレアリアを無視すると理解できない箇所が『試験』の中に登場する。

(13)　– Ставьте мне, что положено, и не мучайтесь, – студент сказал это резким, решительным тоном. И встал.

На профессора тон этот подействовал успокаивающе. Он сел. Парень ему нравился. – Давайте говорить о князе Игоре. Как он там себя чувствовал? Сядьте, во-первых.

Студент остался стоять.

– Ставьте мне двойку. (Шукшин1992: 33)

「悩むことなく、然るべき点数をつけてください。」学生はきっぱりと、つっけんどんな口調でこう言った。そして立ち上がった。

これを聞いて教授は落ち着いた。彼は座った。若者が気に入っていたのだ。

「イーゴリ公について話そうではないか。彼はどのような気分だったのだろう？まずは座りなさい。」学生は立ったままだった。

「私に 2 をつけてください。」

(14)　– Профессор, поставьте мне двойку, решительно сказал студент и встал.

Профессор немного успокоился. Парень ему нравился.

– Поставьте мне двойку. (Антонова и др. 2011: 90)

「教授、私に 2 をつけてください。」きっぱりと学生は言って席を立った。

教授はいくらか落ち着いた。若者のことが好きだったのだ。

「私に 2 をつけてください。」

12　東郷正延、他編『研究社露和辞典』2431 ページ。（удовлетворительно の項目を参照）

(13) と (14) とを比べると、教科書版では相応に内容が削減されていることが判る。オリジナルでは学生の口述する内容が乏しいので教授が助け舟を出そうとして何かを尋ねようと悩んでいる部分がある。それを受けて「悩むことなく…」と始まるが教科書版ではその「助け舟」の部分も削除されているため、初めから「私に 2 をつけてください。」と学生が切り出している。続く地の文も、直訳すれば「教授の側にはこの（学生の声の）調子が落ち着かせるような作用を果たした」となるが構文的に無生物主語の構文であり、難解であるためか教科書版では教授がいくらか落ち着いた、という生物主語の文に改められている。

そして肝心な最後の学生の会話だが、「2 をつける」ということの意味が成績として「不可」に該当するという点を理解していないと、この学生による発言の真意が理解できないことになる。つまり、学生はこの科目で落第点を取ることを覚悟したのである。教科書版では「2」をつけて欲しいと学生は 2 度にわたって教授にお願いしていることになり、ますます「2 をつける」ことのレアリアが重要となっている。

6. 結論

本稿では、Антонова и др.（2011）において採用されている文学作品『試験』のテキストを取り上げ、外国語としてロシア語を学ぶ学生のための学習用教材としての有用性について、動詞の計量的データ及び文中での意味・用法の観点（cf. 第 3 章）、統語論的観点（cf. 第 4 章）、ロシア語のレアリアという観点（cf. 第 5 章）から、オリジナル版テキストとの比較を通して検証を試みた。

外国人ロシア語学習者にとってとりわけその習得が困難であるとも言われている、動詞の体のカテゴリーの意味・用法については、命令法における不完了体動詞の使用という、追加で説明を多く要するような用法について、体のカテゴリーの意味・用法の最初の導入時点での知識で理解が可能になるような形で変更されている。さらに、本文全体で用いられている動詞の選定という観点（cf. 第 3.3. 章）から見ても、3,500 語習得レベルで収まるような動詞に抑えられている。

また、統語論的観点から見た場合の特徴としては、連辞 быть の文中で

の語順という、文（テキスト）の情報構造に関わる重要な（かつ相応に複雑な）部分について、初級学習者が目の前の文やテキスト全体の、必要最低限の意味をまず的確に把握することができるということを最優先にした修正が施されている。

これらのことから、教科書版のテキストは、それが想定している学習者のレベルに沿う形で、適切に調整がなされていると考えられる。

また、レアリアという観点から見た場合にも、ロシアの高等教育機関における試験の実施の要領や成績評価に関する独特の用語といった、外国人学習者にとっては未知のものである内容について、外国語学習プロセスにおいて導入する役割をこのテキストは当該教科書内で果たしており、学習用教材として取り上げられる文学作品として適切なものであるとみなすことができるだろう。

参考文献

木村彰一訳『イーゴリ遠征物語』岩波書店、1983 年。

シュクシーン・ワシーリイ、島田陽訳『シュクシーン作品集　あかいカリーナ』恒文社、1979 年。

シュクシーン・ワシーリイ、染谷茂訳『現代のロシア文学 1　日曜日に老いたる母は…』群像社、1983 年。

東郷正延、染谷茂、磯谷孝、石山正三編『研究社露和辞典』研究社、1989 年。

藤沼貴、水野忠夫、井桁貞義編著『はじめて学ぶロシア文学史』ミネルヴァ書房、2003 年。

Антонова В. Е., *Нахабина М. М.*, *Толстых* А. А. Дорога в Россию: учебник русского языка (первый уровень). В 2 т. Т. 1. 4-е изд. СПб. Златоуст. 2011.

*Морковкин В. В. (*ред.*)* Система лексических минимумов современного русского языка. 10 лексических списков. От 500 до 5000 самых важных русских слов. М. Астрель; АСТ. 2003.

Рассудова О. П. Употребление видов глагола в русском языке. М., Изд-во Московского университета. 1968.

Шукшин В. М. Рассказы: книга для чтения с комментарием на русском языке. М. Русский язык. 1981.

Шукшин В. М. Собрание сочинений в шести томах. Том второй. Рассказы 1960-х годов. М. Молодая гвардия. 1992.

Шукшин В. М. Собрание сочинений в 5 томах. Том 3. Екатеринбург. Уральский рабочий. 1993.

Шукшин В. М. Охота жить. Рассказы. СПб. Азбука. 2017.